

鶴見川流域ツーリズム・フォーラム

「バクの流域からいるか丘陵へ、
足もとを楽しみ地域に貢献するエコ・ツーリズムの展開」

バクの流域ツーリズム
流域ワンダーランドを歩こう

日時：2009年11月23日（祝）

会場：慶應義塾大学日吉キャンパス藤山会館

講演「エコ・ツーリズムへの取り組み～世界の視点で足もとを見つめる～」

講師 首都大学東京 都市環境学部 教授 菊地俊夫氏

<要約>

私は、東京都立大学理学部地理学科で、主に土地利用の変化、土地被覆の変化を研究していました。都立大学が首都大学東京になり、観光科学域というコースができ、そこで主に環境の保全や環境の適正利用を研究しています。その中で、エコ・ツーリズムやルーラル・ツーリズムを研究しています。

今日はエコ・ツーリズムの研究の中で、世界でどういうエコ・ツーリズムが行われているのか、それを踏まえて、日本ではこれからどういうエコ・ツーリズムが必要なのかを紹介します。



菊地 俊夫 氏

【エコ・ツーリズムとは何か】

「エコ・ツーリズムとは何か」とよく問われます。よく「100人のエコ・ツーリズムの研究者がいれば、100通りのエコ・ツーリズムの考え方がある」と言われるように、千差万別で、いろいろなエコ・ツーリズムの定義があります。

その中で最近、Blamey（ブレイメイ）という人が2001年に、いろいろなエコ・ツーリズムの定義を最大公約数的にとらえて、次の三つの視点を持っているものがだいたいエコ・ツーリズムではないか、と唱えました。この考え方が、世界でだいたい共通しているエコ・ツーリズムの概念とされています。それは以下の三つです。

(1) 自然の資源や環境の保全を基盤にする。

自然をベースにしたもの。自然的な資源をベースにしたツーリズムである、ということ。その中には自然の資源の保全や保護も含まれています。

(2) 教育・啓蒙的な効果をもつ。

つまり教育の側面をもつもの。環境が大切であるとか、環境のしくみとか、環境を理解するような考え方が出てきます。

(3) 観光として持続的に行われる。

つまり適正利用や地域振興がかなり持続的に行われるようなツーリズムです。

【エコ・ツーリズムの三つの型】

こうした三つの視点でエコ・ツーリズムは生まれますが、自然資源や教育、持続的なもの、というのは人によって狭くとらえたり、広くとらえたりします。とらえ方によってまた、エコ・ツ

ーリズムの考え方が違ってきます。どういう違いかと言うと、一つはアメリカ型、もう一つはヨーロッパ型、それからニュージーランド・オーストラリア型です。大きくは、この三つの種類に分けられるだろう、とされています。

(1) アメリカ型

自然資源、自然保護を非常に狭く、ストイックに考えて、自然保護、あるいは原生自然を対象にして、自然保全を非常に優先するエコ・ツーリズムです。かつてアメリカ大陸は非常に自然が豊かでしたが、ヨーロッパ人が入ってどんどん開発して自然がほとんどなくなりました。それに彼らは気がついて、「残った自然を守りましょう」と自然保護・保全をベースにしたエコ・ツーリズムが行われるようになりました。国立公園の発祥地もアメリカです。国立公園ができた背景も、エコ・ツーリズムと同様、「原生の自然を守りましょう」ということがありました。

(2) ヨーロッパ型

アメリカ型と対照的、両極にあるものです。自然があるのは当たり前だ、生活の一部だととらえます。「だから、その自然を楽しまなければいけない。守るのではなく楽しみましょう。だから自然を利用しましょう」と。そういう考え方と、地域の伝統文化を含めてエコ・ツーリズムを楽しむ、という中で、ヨーロッパ型は適正利用を主体にして考えることが特徴となります。

(3) ニュージーランド・オーストラリア型

アメリカとヨーロッパの考え方は、ある意味、自然を原始的に守ることと、両極にある自然を楽しむことですが、ヨーロッパでもアメリカでもない、その中間にあるようなものとして、このタイプがあります。「自然環境の保全も保護もしましょう、でも利用もします」。つまり、保全・保護・利用をうまく調和する、調整する、そして、環境の大切さを理解させるような教育・啓蒙もうまく組み合わせていくようなやり方です。

例えば、ニュージーランドの北島にある森林のエコ・ツーリズムでは、カオリマツというニュージーランドにもともとあった巨大な木に関するものがみられます。カウリマツはまっすぐ同じ太さで伸びるので、帆船時代に、マストの材料に適している、ということでどんどん伐採され、森林の自然が破壊されていきました。その中で、残った数少ないマツの森林をニュージーランドは残しています。ただ残すだけでなく、たくさんの人に利用させます。このマツがいかにニュージーランドの森林にとって重要で、ここの自然を代表するものか、ということを理解させる啓蒙・教育が行われます。利用させるとともに保全もし、なおかつ教育・啓蒙もするものになっているのです。

【アメリカ型のエコ・ツーリズム】

アメリカのエコ・ツーリズムには必ず人がついてきます。つまり、エコ・ツーリズムはするが、自然を自由に利用させない、つまり必ずガイド、正確には教育を受けたレンジャーがいます。そのレンジャーによってツアーを組み、レンジャーは必ず環境の大切さを教えます。環境とは壊れやすい、だから人間は環境をぜひ守らなければいけない、といったことを言うのです。こういう非常に受動的なアクティビティーが主体になっています。

アメリカは、こういうことをしないといけない事情があります。アメリカ人は自然公園や国立公園を勝手に歩き回らせると、自然を破壊することがあります。一番、エコ・ツーリズムに対して破壊的な団体はライフル協会、つまりハンティングする人たちです。彼らは、エコ・ツーリズムや国立公園のコースを無視してどんどん入って、自分たちの満足行くまで動物を撃っていきます。だから、こういうふうに非常に制限してゾーニングしてガイドツアーをして自由に入らせないようにして、自然をストイックに守る、ということになるのです。

【ヨーロッパ型のエコ・ツーリズム】

それに対してヨーロッパ型は、みんなが地図を見ながら自然のなかを自由に歩き回ります。畑や牧草地を歩き回ったり、山の中の休憩地（レストエリア）で遊んでいます。自由に自然を楽しんで歩いて、自分たちの余暇やレクリエーションを楽しみながら心身をリフレッシュする、ということです。

ヨーロッパの野山は、もとはオープン・フィールドと言って、所有者はしっかりしているが、利用はみんな。だから、これはみんなのもの、だから、みんなで野山を自由に歩いて、畑の中を歩いても、別に問題ない、だから、こういうことが行われます。たとえばドイツ人は、お金の掛からないレクリエーションは大好きです。アメリカ人はお金を掛けてもいいや、と思うが、ドイツ人はこういうお金のかからないこと、自分たちの周りを歩くことが大好きです。

自由に歩かせたのでは、自然の環境資源は何となく損なわれるのではないか、と思うでしょうが、そこにいろいろ工夫があります。畑とか野山の入り口に必ず「コモンセンス（常識）をもって利用してください」という看板が立っています。つまり、人間は皆常識あるだろう、その常識で利用しなさい、と。それと同時に、散策マップとか案内板を使うことにより、うまく誘導するのです。それで、ちょっと自然が破壊された、道が荒れた、と思ったら誘導路を変えます。それによって知らず知らずのうちに、利用者は自然を破壊しないで、自然を楽しみながら、誘導されて、自由に歩いていく、ということになります。

休憩施設も、日本だったらトイレなどは立派なハードな建設物を建てるものですが、ヨーロッパは廃材を使ったベンチ、廃材を使った橋など、最低限のもの、しかも目立たない、自然に適したものを造って、自然にうまく調和する工夫が生まれてきました。

【オーストラリア型のエコ・ツーリズム】

オーストラリアで最もエコ・ツーリズムが盛んなところ、と言われているグレート・バリアリーフなどでは自然資源を、アメリカのように利用させないようにすればいいではないか、という議論がよくあります。でも、利用させなかったら、この美しい地域の経済は成り立たない、つまり、グレート・バリアリーフ地域は80%は観光収入で成り立っているのです。地域の人の生活を維持するためには観光客を呼び込まなければいけない。そこで、その観光客にどういうふうエコ・ツーリズムで自然を大事に使ってもらうか、ということが考え出されるようになりました。

その一つは紙。エコ・ツーリズムをやると紙が配られます。グレート・バリアリーフでは「あなたが歩いているサンゴ礁の健康状態をチェックしてください」という紙が渡されます。サンゴ礁には白化現象というのがあり、白くなると死んでいる、茶色ければ健康です。観光客がサンダルでサンゴ礁の上を歩くと、どんどんサンゴ礁は死んでいく、自分たちが歩いているサンゴ礁を見て、どれぐらいの健康状態なのかを診るとともに、人間がいかにサンゴ礁に悪い影響を与えているのかを、自分たちでチェックしてください、ということです。そうして、自然の大切さ、重要さ、もろさを理解してもらって、それがエコ・ツーリズムの教育・啓蒙になっていきます。

それと同時に、グレート・バリアリーフではゾーニングをやっています。大きく四つに分けられています。その四つとはA・B・C・Dで、Aは、観光客に自由に利用させるゾーン。観光客がどんどん来て、観光客は自由に歩く、サンゴ礁を見る、中には悪い心がけの観光客がいて、サンゴ礁を捨ったり折ったりして土産としてポケットに入れるかもしれませんが、それでも自由に観光に使います。Bは、Aのサンゴ礁がダメージを受けてきたら、Aを閉鎖してBに観光客を入れます。

だから A と B をときどき入れ替えて、A が少しダメージを受けたら B、B がダメージを受けたら A。だから私たちがグレーとバリアリーフで観光、エコツアーで入るのは A か B になります。

それに対して C は学術研究のみに入れるサンゴ礁です。D は学術研究だろうが何であろうが、人間は入れないサンゴ礁です。A・B・C・D というゾーニング、区分管理をしっかりとすることで、利用と保全をうまく調整しています。

【コミュニティ・ベースド・エコ・ツーリズム】

もう一つ大事なことは、オーストラリアのエコ・ツーリズムにおいて、自然資源に基づく観光空間は地域の人々にとって主要な経済活動の場でもあることです。その空間は自分たちの生計の場として、地元のコミュニティと一緒に管理・保全あるいは適正利用します。地元コミュニティと連携するようなエコ・ツーリズムや、地域間の連携、あるいは観光産業だけでなく他産業、具体的に漁業者とか農業者とか林業者と連携しています。



講演の様子

そういうふうに、エコ・ツーリズムを、単に行政だけが支えるのではなく、地域のコミュニティ、地域間コミュニティ、あるいは他業種の人も支えているのです。今、community-based ecotourism (コミュニティ・ベースド・エコ・ツーリズム) が一般的になっています。このようなエコ・ツーリズムが発展したのも、オーストラリアのエコ・ツーリズムの大きな特徴です。

オーストラリアは、世界でも最も先進的なエコ・ツーリズムが行われている、と言われていす。エコ・ツーリズム研究の学術雑誌「Journal of ecotourism studies」は、オーストラリアのグリフィス大学が中心になり、そこがエコ・ツーリズムのセンター担っていて、そこで多様なタイプのエコ・ツーリズムの研究が多く行われています。なぜ、エコ・ツーリズムがそんなに盛んなのでしょうか。オーストラリアでエコ・ツーリズムが行われているのはだいたい海岸部か、海岸部からちょっと入ったところの熱帯雨林や温帯雨林で、内陸部のエコ・ツーリズムもあります。こういったところに豊かな自然資源が多く残っているのと、そういうところに多くの人々が訪れるからです。それで、多くの観光客に対して教育や啓蒙がしやすく、持続的な利用が常に行われます。

オーストラリアのエコ・ツーリズムの典型として、よく紹介されるのがフレーザー島です。自然的な資源、ビーチとか、砂丘でできた島で、非常に壊れやすいものとなっています。そこに熱帯、温帯の植生があります。アクティビティーとしてはスイミング、魚釣り、ウォーキング、景観の観察などができます。エコ・ツーリズムのコースは、島の全部を回るわけではなく、ごく一部しか利用しません。すべてを自由に回らせるのではなく、ゾーニングによって、利用者は空間的に厳しい制限を受けています。

オーストラリアのフレーザー島におけるエコ・ツーリズムは、大型のバスを使ってやるのですが、だいたい一人当たり 185 ドルか 195 ドル、1 万円以上して、そんなに安くありません。7 時から始まり、16 時まで。森の中を走る、ビーチを走る、ウォーキングをする、というコースがあります。海を利用できるのは、引き潮でビーチが利用できるようになると、バスでビーチを走ります。ビーチが使えない時には、森の中を走って、森の中を歩く、というツアーになります。

なぜバスを使うかと言うと、観光道路は一切ないからです。舗装道路、普通の車が走れる道路は一切ない、造らない、だから観光客はバスか、砂丘を走れる 4WD を使います。砂でできた島だから壊れやすいので、たくさんの人が訪れて、大きなダメージが与えられるところもあり、自然への影響も大きくなります。

オーストラリアのエコツアーの考え方は「被害を分散させない」、つまり、いろいろなところへ自由に行ってもらい、フレーザー島の場合で言うと、バスの轍による土壌侵食がいろいろなところに起きるよりは、集中してもらった方が後で管理がしやすい、自然への影響は大きいですが、管理しやすい、ということでこういうエコツアーが行われます。バスの中は全部ガイドツアーで、ガイドがエコ・ツーリズム、自然の状況や歴史、あるいは地形、地質の話をしながら、環境の大切さを説明します。ガイドツアーが非常に充実していて、教育効果が大きいものとなっています。

こういうガイドツアーは、コミュニティーの人たちが協力してやっています。業者もやっていますが、業者に地域のコミュニティーが協力してエコツアーのガイドをするようになっています。そのため、地域のコミュニティーの人がガイドすることで、ガイド料はその人たちの収入源になります。一人当たり 195 ドルと言ったお金は全部、地域のコミュニティーの人の生計の足しになる、ということになります。

こういうオーストラリアのエコ・ツーリズムを踏まえて、日本のエコ・ツーリズムはどうなっているのか、みてみましょう。環境省のエコ・ツーリズムの推進モデルにⅠ型、Ⅱ型、Ⅲ型があります。

Ⅰ型は知床、白神、小笠原、屋久島というようなところ、比較的、原生自然が残っているところ。Ⅱ型は裏磐梯、富士山麓、六甲、佐世保で、既存の観光地、マスツーリズムの観光地でエコ・ツーリズムをやりたい、ということ。Ⅲ型は、ある意味では自由にエコ・ツーリズムを利用し、みんなが楽しむエコ・ツーリズムをしましょうよ、というようなところ。Ⅲ型は飯能、飯田、南紀、湖西などがモデル地域に選ばれています。これらは、生活空間の近くにあるような身近な環境を使ってエコ・ツーリズムができないだろうか、ということになっています。いわば、里山とか里地の身近な自然、あるいは地域の産業とか生活文化を活用したエコ・ツーリズムです。指定されているところは今四つだけですが、それ以外にもいろいろなところでもできそうだし、ということで、Ⅲ型のエコ・ツーリズムはいろいろなところで行われるようになってきました。

【事例紹介：トトロの森】

その一例が「トトロの森」で、これは狭山丘陵にあります。狭山湖、多摩湖の周辺は緑が多かったのですが、だんだん都市化が進んで、農地ではないところは、相続が絡むと農家は森を売ってしまいます。それで住宅地、あるいはレジャーランドになったりゴルフ場になったりします。どんどん森林がなくなり、そういう中で、では、どう森林を残そうか、ということで、トトロの森ができました。それにより保全されて、この辺の森林が残っていく状況が作りだされました。

もともと狭山丘陵の森は、非常に生活に結びついた森であり、生活資材になったり、堆肥をつくったり、薪炭を供給する森でしたが、エネルギー革命、化学肥料の普及で森の役割は薄れてきました。昔は 10 アールの畑があると、その堆肥をつくるために 10 アールの林地が必要であり、

それは化学肥料が使われていらなくなりました。森林は農地ではないから相続税がかかり、ほとんど役に立たず税金を納めるなどお金も掛かるので、農家は森林を売ってしまうのです。

しかしよく考えると、森は『となりのトトロ』のアニメの舞台にもなりました。また、風水に「背山臨水」という考え方があります。背後に山があり、目の前に水、水田が広がる、池が広がる、という風景は、風水では人間が一番心を安めることのできる風景である、と言われています。宮崎駿のアニメは『となりのトトロ』に限らずすべて、風景が背山臨水です。私たちは彼の一連のアニメを観ると、何となく心が落ち着いて懐かしいと感じます。なぜかと言うと、それは日本のもともとの風景、原風景が背山臨水の風景として描かれていおるからです。そして、そういう風景を残した方がいいのではないか、という気運が狭山丘陵でも高まってきました。ある意味で鎮守の森としての機能、つまり地域アイデンティティーのシンボルとしての森です。そういった中で、今、エコ・ツーリズムの舞台として、いかに保全していくのか、考えられるようになってきました。森を残すやり方はいくつかあります。

- ・緑地指定をする（都市緑地保全法）。これをするると利害が絡むので、なかなか法律でひとくくりできない、という難しさもあります。
- ・市民緑地法などにより、自治体が緑地を借り上げる。借り上げるのではいつかは返さなければいけません。だから恒久的に緑地として残らない可能性があります。
- ・緑地の買い上げ、公有地化。力のある自治体であれば、お金を出して買えばいいが、自治体も予算がありません。

そこで狭山丘陵が行ったのはナショナルトラストという方法です。宮崎駿さんがトラストの顔になり、寄付金を集め、集めた寄付金で森を買い上げていきました。今、1号地から6号地までのトトロの森があります。そして、ナショナルトラストの運営を行う「トトロのふるさと財団」が1990年に設立されました。

ここからがエコ・ツーリズムと係わることになります。森を買っただけでは駄目です。森は常に管理したり保全したり利用したりしないと意味がありません。トトロのふるさと財団は、相続が発生した農家から、寄付金を使って森を買います。その森で、地元の人たちと協力して、下草刈り、落ち葉採集、森林の動植物と親しむ会を設け、森林の中を歩いたり、環境学習をする、というエコ・ツーリズムを始めました。つまり、財団と行政と地元農家と新住民＝この周りに住んでいる都市住民が協力して、こういう森を維持、活用する活動が行われるようになりました。

農家の人が森の保全の仕方、利用の仕方を教えます。教わるのは新住民です。荒廃した平地にも、地元農家と協力して、新住民の手で維持管理をします。平地林の有効利用にもつながります。地元農家の人たちは地域の伝統的な生活のやり方、知恵といったものを教えたいと思っています。教えることで生きがいもできてきます。新住民は、隣は誰か知らないが、こういう活動に参加することにより、ある意味で顔見知りになったり仲良くなったり、あるいは一つのコミュニティがでたりします。また、新住民と旧住民のつながりも出てきます。そういう森をつなぎ手として新住民、旧住民のコミュニティがうまくつながり、それを利用するエコ・ツーリズムも彼らによって生まれる、という状況になってきました。

トトロの森を支える人たちはどういう人か、知るために参加者にアンケートを取ると、東京や西武線沿線の人も来ているが、だいたいトトロの森の周辺のコミュニティーの人が約80%です。近隣コミュニティとともにトトロの森の保全と適正利用をしているといえます。そういった意味で、日本のコミュニティ・ベースド・エコ・ツーリズムがこういったところで完成しているのかな、と思っています。やはり、自然の利用やエコ・ツーリズムは、地元の人たちと協力してやるのが大事だ、ということになります。都市住民そして地元の人たちが協力することにより、

里山の保全、エコ・ツーリズム、余暇空間を維持することが大事になります。

エコ・ツーリズムをモデル化すると、一方に、もともとのコミュニティー、自然資源、それを利用した活動、という農村的な要素があります。もう一方には都市的な土地利用、都市的コミュニティー、都市の経済活動という都市的な要素があります。都市的な要素と農村的要素は相反するもので、どんどんかけ離れていきます。都市的要素が強くなれば、農村的な要素は小さくなり、都市的要素が大きくなります。それでは駄目です。ではどうするか、と言うと、コミュニティー・ベースド・エコ・ツーリズムをつなぎ手にして、農村的要素と都市的要素をうまくつなぐことになります。そういうエコ・ツーリズムでは、自然を親しむ、楽しむ、保護する、ということも大事ですが、コミュニティーを大事にしていく、あるいはコミュニティーとコミュニティーをつなぐ、そしてコミュニティーによって支える、ということが大事になってくる、ということになります。

【高尾山における自然ツーリズムの問題】

最後に、エコ・ツーリズムをどんどん発達させた時に、どういう問題が起きるのか。最近、私が研究している高尾山の例です。

高尾山は、最近、ミシュラン旅行ガイドブックで三つ星になったせいもあり、非常に観光客が多くなっています。5月の連休は、原宿の竹下通りを歩いているような感じです。頂上でお弁当を食べる場所ありません。そんなところで本当にエコ・ツーリズムができるのでしょうか。

高尾山を訪れている人は、みんな環境に対して非常に高い考えを持っています。ゴミ一つ落としていきません。それでも登山道は荒廃しています。裸地化、植生破壊、土壌侵食など、つまりオーバーユースの問題が起こっています。登山道が削れて、階段が破壊されたりします。これは、登山客が悪いわけではなく、登山客が多いからです。多いから複線化したり追い越すために、どんどん脇道を行ったり、歩きづらから横を歩いたりします。

それをどう考えたらいいのでしょうか。つまり、エコ・ツーリズムは、どんどん発達して歩く人が多くなってきた時に、その人たちをどうコントロールしたらいいのか、という問題が出てきます。

高尾山は登山道が全部で六つあります。土地の管理形態も東京都が管理しているところ、国、あるいは寺、民有地もあって入り混じっています。登山道の荒廃について、階段の段差一つ一つについて、どれぐらい侵食されているか、調べてみると、頂上の急斜面のところほど、非常に侵食されている、などが分かりました。

こういう状況を見て、私たちはどういう保全の仕方、利用の仕方を考えたらいいのでしょうか。ハードな面から見ると、利用しやすい階段づくりをしなければいけません。あるいは階段の構造を工夫する、というやり方もありますが、もう一つ、考えなければいけないのは、エコ・ツーリズムでも何でもそうであるが、場所の適正規模に合った利用の数も考えなければいけません。

つまり高尾山はいったいどのぐらいの適正規模があるのか。それを超えた時に、自然が破壊されていきます。自然について、今分かってきたことは、カタストロフィー理論と言って、あるところまでは持ちこたえるが、ある段階を過ぎるとガタッと落ちます。その落ちるところの適正規模をこれから見究めるのです。見究めた時に、どういう利用の仕方が考えられるのでしょうか。

高尾山は現在、皆さんを自由に歩かせています。エコ・ツーリズムもだいたい自由です。でも、これからは自由も必要ですが、ある程度、保全とか適正利用を考えたい時に、管理を考える必要があります。東京都が考えた管理は、高尾山に登るのに課金したら、100円取ったらどうか、というものでした。それはすぐに却下されました。集めたお金は誰が管理するか、となると管理形態

がいっぱいあるから難しくなります。次に考え出されたのは登山道を制限すること。一号路を登り専用にして、稲荷尾根道を下り専用にする、とかです。それにより登山道の崩壊、複線化、裸地化、侵食を食い止められるのではないか、ということです。

エコ・ツーリズムの次に考えなければいけないのは、そういった調整された合理的な管理、スムーズな管理、無理のない管理をどうするか、ということも考える必要があると思います。

パネルディスカッション「足もとの自然からはじめる、流域エコ・ツーリズム」

パネリスト 菊地 俊夫氏（首都大学東京 都市環境学部 教授）

岸 由二氏（NPO法人鶴見川流域ネットワーク 代表理事
／慶應義塾大学 経済学部 教授）

大澤 浩一氏（NPO法人鶴見川流域ネットワーク 理事
／・ツーリズムPJ 代表）

コーディネーター 伊藤 隆広氏（NPO法人鶴見川流域ネットワーク／事務局支援スタッフ）

<要約>

1. エコ・ツーリズムが目指すもの

伊藤 氏

パネリストの皆さんの自己紹介と、ご自身とエコ・ツーリズムとの関係についてお話しください。

「自然と共存する持続可能な都市再生」のツールとしてのエコ・ツーリズム

足もとの自然は、ダイヤモンドの原石。その原石を磨いて、安全で魅力のあるエコ・ツーリズムの拠点をつくるのが仕事です。

岸 氏

私は鶴見川流域の、ある種のエコ・ツーリズムに大きく掛けて、実線活動をしています。小網代の保全活動は、参加して25年目で、制度的には一応、保全が実現しました。この多摩三浦丘陵全域で、ある種のエコ・ツーリズムを考えています。

ただし、私の枠組みは、基本は都市再生です。だからエコ・ツーリズムは、自然と共存する都市圏をつくるためのツールの一つです。エコ・ツーリズムが目的ではなく、具体的に言えば東京首都圏で自然と共存する持続可能な都市、あるいは都市文化をつくるのに、エコ・ツーリズムの手法が

どう役に立つかが、私の課題です。東京首都圏でその課題が解ければ、破壊が進んでいる自然との共存が課題となってくる世界の、ありとあらゆる過密都市で応用がきくキットができるであろう、と考えています。

菊地先生のお話で、私の立場との敢えて違いを言うと「足もと」。お話いただいた「足もと」は、まず、素晴らしい場所があつて、それをどのようにエコ・ツーリズムの対象にしていくか、というふうに話が始まります。たとえば、鶴見川流域ネットワークにしても小網代にしても、足もとにある自然は、ダイヤモンドの原石のようではあるが、ゴミだらけ、危なくて人が近づけないところ、農家が全部が放棄して数十ヘクタールの竹がぼさぼさに生えている場所とか。だからそのままでは人は誰も来ない、子どもは近づけられない、人を連れていっても喜んでくれない、それが我々の足元です。

そこでどうやって、この原石を磨いて、安全で、自然が魅力的で、安心のサポートもある、言ってしまうとエコ・ツーリズムの拠点をつくるか、という作業をしています。その段階からなかなか先に進めていませんが、つくる過程で、行政の河川行政や下水道、都市計画のいろいろな施



パネルディスカッションの様子

策から、安全で自然豊かで安心な都市エコ・ツーリズムの拠点をつくるのに役に立つものを全部使います。逆に、そういう政策を積極的に応援する動きをつくる、ということをしています。

菊地先生のお話と対照させると、コミュニティー・ベースド・エコ・ツーリズムではあるが、そこに住んでいる人をベースとしたコミュニティーでも、自然を案内するインストラー的な人たちのコミュニティーに基づいたエコ・ツーリズムでもありません。我々なら流域ネットワークキング、小網代なら、いるか丘陵ネットワークというテーマを共有したテーマ型市民に立脚したエコ・ツーリズムを推進中です。

領域全体では、例えば鶴見川流域の中にも、既に、いわゆるエコ・ツーリズムの対象にできるような四季の森公園とかあり、これから魅力的な場所をつくらなければ、でなく、もう安定していて、過剰利用しないようにするにはどうしたらいいか、という段階のところがいくつもあります。多摩三浦丘陵で言えばさらにたくさんあります。しかし、鶴見川流域ネットワークやいるか丘陵ネットワークが扱っているところには、そういう場所はほとんどありません。ダイヤの原石だけどゴミだらけ…というような場所で、生きものをどれだけ面白く、子どもたちや市民に見せるか。それを面白がり、ゴミ拾いしながら、というエコ・ツーリズムや、行政の動きを支えるエコ・ツーリズム。ある意味では、破壊されてしまって、これから再生を図らなければいけない都市の自然に立脚した「都市再生エコ・ツーリズム」はあるのか、というのが我々にとって課題だと感じています。

自分が住んでいる地域＝流域の痛み、魅力を自分の暮らしと関連づけるきっかけ

大澤 氏

鶴見川流域ツーリズムの担当理事をしています。

岸先生のお話よりも、私は少し広く考えています。地図が好きで地図をもとに旅をする、ということから鶴見川の活動に係わり、鶴見川を楽しくする会に22年係わり、毎月1回、川歩きをやっています。割と楽しいところも歩き、中には「何でこんなふうになっちゃったんだろう」というところも見ながら歩くことで、自分が住んでいる地域＝流域の痛み、魅力とかを自分の暮らしとどう関連づけるかが、私が考えている流域ツーリズムの根っこにあるところか、と思っています。

そういう趣旨が分かれば、我々の活動や岸先生の拠点づくりに参加するだろうが、そこまで行かない取っ掛かりの部分はどうするか。鶴見川流域に住む百八十数万人の1%にも満たないかもしれないが、できるだけ多くの方が、自分の住んでいるところを少しでもよくしたい、と思った時にどうすればいいのか。そういうことに気付いてもらう仕掛けとして流域の中を歩いてもらうのです。だから、遠くから来るのではなく、流域に住んでいる人が自分の住んでいるところを再発見する、いいところも見つけるし課題も見つける。そういうツールとして流域ツーリズムをはやせたいと考えています。

自分の住んでいるところをまず発見することから、エコ・ツーリズムは始まる

菊地 氏

先程の話から抜けているところが一つあります。敢えてしなかったのですが、私が今研究しているのは鶴見川流域の寺家のエコ・ツーリズムをやっています。寺家のエコ・ツーリズムは、私の考えから、理想型に非常に近いところで、コミュニティーが里山と農地を支えています。コミュニティーは住んでいる農家の人だけでなく、周りの新住民のコミュニティーも支えていて、非常によいツーリズムの場所だと思い、今一生懸命研究して、世界に発信にしようと思

っています。2~3年したら、オーストラリアのフレーザー島のように日本の寺家が有名になっているかもしれません。

私は初め、エコ・ツーリズムに興味がなかったが、自分の住んでいるところをまず発見する、それにより住んでいるところに愛着が持てるようになる、その発見はエコ・ツーリズムの原点にあるのかな、と思うようになりました。今、八王子のみなみ野という新興住宅地に住んでいます。新住民ばかりのところであるが、そういう人たちが、自分たちの周りに何があるのだろう、とウロウロ回って、そこに子どもが加わり、だんだん発見してきます。子どもたちは、発見することにより、そこがふるさとになるのです。それで「住んでよし、来てよしの街」みたいなものができてきます。

エコ・ツーリズムは大仰に構えなくても、自分たちの周りのものを発見する、ということから始まるのかな、と思っています。

2. 流域ツーリズムの意義とは

伊藤 氏

大澤さんに、流域ツーリズムの総合的な取り組みについて、行政の施策を応援しながら取り組んでいる事例について紹介をお願いします。

鶴見川流域水マスタープランが推進する“鶴見川流域ツーリズム”

大澤 氏

簡単に話すと、鶴見川でTR ネットの活動は再来年で20年ぐらいになります。そのもとになっているのは流域です。行政も、国はじめ自治体の河川管理者は鶴見川の流域をベースにいろいろ施策を考え、協議会をつくってやってきたが、なかなかそれ以外の行政、住んでいる方々は、流域という範囲が理解しにくいものです。鶴見川流域では、洪水の問題はずっとやってきて、総合治水も鶴見川をモデルとして進められてきました。本当にいい川、いい地域になったか、と考えるといろいろな問題があります。人口がこれだけ集積した、ということが一番の問題です。また、飲み水は外から来て、使った後は鶴見川と河口域に流す、ということもです。



大澤 浩一 氏

そういうことから始まり、水の循環という問題が出てきました。これだけ都市化された流域では、もとにはなかなか戻せないが、できるだけそういうことに気付いて、水の循環をよくすることを始めましょう、ということで協力してつくったのが「鶴見川流域水マスタープラン（略称、水マス）」です。水の循環を、流域をベースにもう一回考えましょう、関係する施策を合わせていき、市民も企業も協力していきましょう、というのが「水マス」の大きな趣旨です。

では何をやるのか。市民側でできることは、TR ネットが活動してきたことに尽きるでしょう。さらに、流域に住む百八十数万人に少しでも伝えることが必要だ、ということで、水マスタープランの施策の大きな五つの柱の最後は「水辺とふれあう場所をつくろう、その中に、鶴見川に住んでいる人、周りで働いている人が、鶴見川のいいところ、あるいは問題なところをちゃんと認識して、そういうものを共有して、少しでもよくなるような活動を推進する、あるいはそういう

暮らし方を推進しよう」としました。そこで「流域ツーリズム」が大きな施策として入れられたのです。

この考え方が出てくるのは10年前ぐらい、水マスタープランの検討が始まった頃です。鶴見川流域のかなりを占める横浜市の5区がサインをつくりました。行政界が違うので、なかなか共通に考えてくれなかったが、やっと5区がまとまりました。「鶴見川を少し、よくしよう。市民が利用できるように考えよう」という考えが中心になって、サインをつくり、TRネットも協力しました。それがきっかけとなり鶴見川流域環境整備構想ができました。鶴見川をどうよくしたらいいかを、区役所レベルで考えたものです。これにいろいろと意見が出て、区民からも出ました。流域の住民はほとんど外からやってきて、鶴見川流域で暮らしながら、通っているのも東京だったりします。そういう人たちに、鶴見川がどうなっているか、それがどう自分の暮らしに係わりがあるのかを分かてもらおう仕掛けとして、とにかく歩いてもらおう、あるいは訪ねてもらおう、流域でできた野菜を食べよう、そんなことを通じて、鶴見川はどうなっているのか、暮らしへの影響は、ということなどに気付いてもらう取っ掛けとして、流域ツーリズムの構想をまとめて、水マスタープランに提案して、取り上げられ、水マスタープランのツールになった、という経緯があります。

市民団体による持ち場の定例活動の継続が“流域ツーリズム”の基本 岸 氏

今の話は、鶴見川流域ネットワークはどうやってできてきたのか、という話に絡みます。私は1985年まで鶴見の河口で暮らしていたのが、町田の源流域に引っ越しました。偶然ではなく流域ネットワークをつくろうと思って越しました。最初から、鶴見川の流域に自然の拠点をつくり、ナチュラルリストのネットワークをつくり、そのネットワークで自然を豊かに守って、みんなが享受できるシステムをつくろう、と考えたのです。どちらかという自然保護に重点がありました。当時は、都市計画のいろいろな枠組みとか河川・下水道の枠組みと一気に組んで、とかは考えませんでした。

1990年にはナチュラルリストのネットワークができて動いていきました。その理由は、菊地さんのみなみ野の話と同じ。私が越した小山桜台は団地だけあって周りは農地などで、遠くに遊びに行く便が悪いところでした。子どもたちはほとんど同じ幼稚園に通い、その親たちのグループが子どもたちと一緒に歩く、歩いて歩いて遊んでいるうちに、周囲にこんないい場所がある、でも開発されちゃうんだ、ということがよく分かり、1988年に新団体をつくりました。それが流域全体のナチュラルリストの基盤となり、下流で先行して活動していた大澤さんたちと出会い、中流、支流のいろいろな団体ともバラバラと統合されて、1991年に、鶴見川の総合治水対策、あるいは河川環境管理計画を推進する国と組んでネットワークをつくったのです。

私は最初、とにかく拠点をつくらなければならない、という思いが強かったのです。「ここに来れば、周囲はゴミだらけの鶴見川と見えるが、魚がいるよ、虫が面白いよ、楽しい時間もあるよ」という場所を、月に2〜3回ぐらいお世話する、と公表する団体とともに拠点をつくることに全力を挙げてきました。今、多分、流域全体である程度の規則性をもってやっているところは25カ所ぐらいあり、そのうち20ぐらいは川筋、あとは緑だと思います。

これが私にとっては、鶴見川流域で、都市再生型の流域ツーリズムを動かすすべての基本です。それぞれの団体が持ち場をしっかりと持ち、「周りは汚いと見えていても、ちょっと磨くとダイヤモンドが見えるでしょう」という仕掛けをつくっています。ダイヤモンドだけたたえる人はそれでいいが、「おれも磨こうかな」という人も出てきました。最初はこんなこと、と言われたが、連綿

と続けてきました。都市再生型のエコ・ツーリズムを組み立てていく原点は、やはり、そういう頑張りかな、という気がします。

伊藤 氏

今、話に出てきた水マスタープランの中には、エコ・ツーリズムという文字は出てきませんが、「都市再生」という大きな話題を掲げて、その一つとして、エコ・ツーリズムのような活動、拠点をまずつくり、それをもっと流域のネットワークでいろいろな人に知ってもらおう、という取り組みをしてきた、ということですね。

3. ネットワークが支えるエコ・ツーリズム

伊藤 氏

「流域ツーリズム」を動かしているベースは、流域というテーマを共有したコミュニティー、ネットワークだということが見えてきたと思います。菊地先生に、先程のコミュニティー・ベースド・エコ・ツーリズムのお話の観点から、今の話についてのコメントを頂けますか。

「人」「地域間」「異業種」のネットワークが必要

菊地 氏

世界のエコ・ツーリズムを見た時に、一番不足しているのがネットワークです。

コミュニティー・ベースド・エコ・ツーリズムは今、確かにはやっていますが、コミュニティーは一つで、ネットワークは組み立っていません。世界のコミュニティー・ベースド・エコ・ツーリズムは、リーダーがしっかりして一生懸命やっているが、リーダーがやめてしまうとやめた、というところが多いのです。その結果、そういうコミュニティー・ベースド・エコ・ツーリズムのところは、行政の環境局とか国立公園局とかに吸収されて、パークレンジャーとかのネットワークの中に組み込まれて、コミュニティー・ベースド・エコ・ツーリズムはだんだん廃れていきます。

そうした時に重要になるのがネットワークです。決して一人の人でやるのではない、リーダーはいるが、その人を中心にネットワークを増やして、そしてコミュニティー・ベースド・エコ・ツーリズムの輪を広げていくようなネットワークが必要です。

もう一つ、地域間のネットワークも大事です。エコ・ツーリズムはスポット、点でしかなく、それぞれのエコ・ツーリズムは全くつながっていません。だから、全体の地域の中でネットワークを組むことが大事になってきます。例えば、「山ろく」というネットワーク、鶴見川のような「流域」のネットワーク、あるいは「丘陵地域」。そういう一つの自然のまとまり、あるいは生態系のまとまりの中で、一つの地域間のネットワークをつくるのが大事になります。

もう一つは異業種のネットワークです。観光業と農業、林業、漁業とかの異業種が結び付きません。それにより、鶴見川で言えば、ここに企業が加わり、例えば、ライオンの人たちが協力してエコ・ツーリズムをやる、とか。エコ・ツーリズムと全く関係ないような人たちがネットワークを組むことも大事になってきます。



菊地 俊夫 氏

つまり、コミュニティー・ベースド・エコ・ツーリズムの大事なことは、それ自体だけでなく、いかにネットワークを組んでいくか、ということもあると思います。

伊藤 氏

菊地先生から、「地域間のネットワーク」というお話がありましたが、この点、いるか丘陵のネットワークを活かしたエコ・ツーリズムについて、岸先生から紹介いただけますか。

地域間—いるか丘陵のネットワークを活かした、 首都圏グリーンベルト構想を推進するエコ・ツーリズム

岸 氏

都市再生という時に、どの枠組みで考えるか、ということがあり、私はグレーター東京、首都圏全体を基本的枠組みで、うまく自然と共存するような都市再生の方向が出せれば、後は応用問題で行くだろうと考えています。それを動かすためにどうするか。首都圏は大規模な自然と共存する持続可能な都市構造をもっていない、ということを深刻に考えなければいけません。

もともとは持っていたのですね。1958年、第一次首都圏の計画の時に、近郊地帯という名目で、川口辺りから今のさいたま市の縁を通り、長さ70km、面積700~800平方キロの半円形の巨大な、言ってしまうとグリーンベルトの計画がありました。農業を基盤として、鉄道や道路も通して、その結節点には住宅もつくるが、開発もするが、中心市街地の拡大抑制で、大災害にも対応できる農業地帯をつくることを、国の決定として出されたが、市民と労働者の反対でアツという間に潰されました。これは深刻な話なのです。それ以降、日本国では首都圏に巨大グリーンベルトをつくることを放棄してきました。残ったのは、近郊緑地保全地域という制度で、皮肉なことに、小網代は30年ぶりに復活したその制度適用で守られました。

私は1987年に、もう一回、グリーンベルト計画をやらないと、日本の首都圏は自然と共存する持続可能な都市とは言えない、と思い、多摩三浦丘陵をグリーンベルトにしよう、という運動を始めました。小網代の活動を始めたのは84年、グリーンベルトは87年、鶴見川はその後です。それが1995年に、多摩三浦丘陵は、イルカの形をしているから「いるか丘陵」となりました。この丘陵上に、再生型のエコ・ツーリズムのネットワークを重層的につくりあげていけば、ここは面的ではなくて、ネットワーク型の首都圏グリーンベルトに、特別な土地利用等に関する特例の適用されるグリーンベルトになっていける、と思っています。

最初、駅を中心にして「多摩三浦丘陵にどんなに面白い自然がある場所か」と広報して共有しよう、と考えました。なかなかうまくいかなかったが、1997年に「いるか丘陵の自然観察ガイド」という本を山と溪谷社がつくらせてくれました。歩いて、こんな面白いところがあるよ、と知らせるものだが、売れませんでした。この本を利用して「駅からウォーク」をやっている鉄道会社がいくつもあると聞いています。当時、京浜急行から協力したいと言ってきたが、結局、社内で反対があり、実現しませんでした。

今、考えていることは、焦っては駄目だ、ということです。流域ベースのランドスケープのツーリズムを組む、ネットワークを組む、多摩丘陵上に数十の大小の流域があり、そのすべての流域で、理念としては、基本的に重要と思われる流域で、鶴見川と同じような運動を起こそう、としています。起こってきたら、それぞれ固有の課題、固有の可能性、固有の制約があるわけだから、それでつながったら面白いネットワークになるだろう、ということで、今その方向に転じています。2008年は河川環境管理の助成金を得て、一度、動かしてみました。それで伊藤さん、白井さんが頑張って「いるか丘陵ウォーキングガイド」を作成しました。流域の面白いところに焦

点を合わせる、ということをしつかり意識しています。もう一度、いるか丘陵上に流域ランドスケープ・ベースの再生型エコ・ツーリズムのネットワークをたくさん育てていく、その横のつながりをつくろうとしています。

小網代の話は、全体にとって極めて重要です。小網代の保全是決まったが、農業放棄されて50年たつので、外枠の流域の生態系・地形はすばらしいが、完全にほこりまみれのダイヤモンド原石で、磨かないとどこも使えません。幸い、小流域がいくつもあるので、中央の流域は、徹底的に手を入れて、大型財団から助成を受けて、人が入っても大丈夫のように整備していきます。あと、いくつかの小流域は、次に助成があったら、「ここはホテルの大発生する場所に」「ここは最終的にはサンクチュアリにして人は入れない」といったゾーニングベースの流域ツーリズムにしていきたいと思っています。

そういういろいろな試みのネットワークの場所として、いるか丘陵を考えています。よい結果ができれば、首都圏全体の世界に対する見え方が変わるでしょう。ここが東京・首都圏の大エコ・ツーリズムのベルトの拠点になるかもしれません。そんなビジョンで、鶴見川をやりながら同時並行で、いるか丘陵も考えています。

伊藤 氏

地域間のネットワークで推進が期待されるエコ・ツーリズムについて、いるか丘陵を例にお話をいただきました。

もう一つ、人のネットワークをどうつくるか、人をどう育てるか、ということもエコ・ツーリズムの課題だと思いますが、この点について、そのヒントとなる活動だと思われるリバーガイドの活動について大澤さんから、続いて菊地先生からエコトップの取り組みについて、お話しお願いします。

人—流域市民のネットワークを活かした、流域市民による「リバーガイド」制度

大澤 氏

リバーガイドは、流域ツーリズムの具体的な活動として、通算でもう10年以上、鶴見川の新春ウォークを、年明け第二土日ぐらいに源流から河口まで42.5 km歩くのを恒例にしていました。TRネットのメンバーが年に1回ぐらい、川を上から下まで見ることで、いろいろなものを共有しよう、という内側プロジェクトとして始まったが、一般の人参加するようになり、今は外向けイベントになっています。その時に、きちんと案内ができないといけない、それから100人を超える規模の人たちをどうやって安全に川沿いを楽しく、帰る時には「よかったな」と思ってもらえるように、おもてなしの心が必要と考えました。また、2008年頃からガイド料を頂くことを始めました。そのためにガイドを養成しよう、自分たちのスキルもアップしつつ、外にもきちんとサービスが提供できるような仕組みとしよう、ガイドとしての基本をきちんと身に付けよう、ということ3年ぐらい前から始めたものです。

個々の団体でも、有料のツアーをやり始めたりしているので、そういうことも流域ツーリズムを推進する重要な事業かと思っています。

人—環境問題のジェネラリストを育てる「エコトップ」制度

菊地 氏

エコトップとは2年前、東京都が始めた資格プログラムです。環境保全と適正利用を担う人材養成プログラム、ということです。

東京都がこれを始めた理由は、環境を適正に利用したり保全するような国の資格とか、統一的なプログラムがない、それなら東京都がやろう、という知事の一声で始まりました。始めるとなかなかいい企画だ、ということで、全国の大学に呼びかけて、最初は首都大学東京でやり、去年は玉川大学、東京農工大学、千葉大学が加わり、今年は桜美林大学が加わり、来年は東京学芸大学、横浜国大、筑波大学、東京農大が加わる予定になっています。

このプログラムの特徴は、環境をいかに保全したり適正利用するか、という視点から、単にスペシャリストの養成でなく、つまり専門的な知識だけを身に付けるのではなく、ジェネラリスト、つまりいろいろなことを総合的に判断して環境をどのように保全したり利用したらいいかを考える人材を育てる、というものです。生態学、地理学、都市計画、環境経済学、環境法とかいろいろなものを学んで、総合的な人材を育てます。しかも野外実習とかを重視してフィールドワークにも強い人材を育てるのです。しかも、企業の環境に係わるような部門、行政の環境に係わるような部門、NPOなどの環境に係わるところでインターンシップを行い、行政、NPOとそれぞれ異なる環境に対する考え方を学んでいきます。そうした中で、ある意味では調整能力、いろいろな見方、考え方ができるような人材を育てていこうとしています。

このプログラムは今年2年目で、首都大学東京で初めて卒業生を出します。エコトップの資格を取った学生は、企業でも、環境に精通している人材が欲しい、ということで割に就職がよかったと聞いています。全国の大学に呼びかけたところ、北大も乗り気で、再来年参加したいと言ってきました。

伊藤 氏

TR ネットには専従職員がいるが、いるか丘陵のNPOでは専従はいません。ツーリズムをすることで、それで専門的に働く人がどんどん出したいと思うが、現状はなかなかまだ厳しいところです。一方で、エコトップ・プログラムや、キリン、ライオン等の企業の支援を受けて、このツーリズムの分野も前進しているのかな、と考えています。

4. 流域エコ・ツーリズムの今後

伊藤 氏

最後に、ツーリズムは異業種が加わることは非常に意義がある、と菊地先生からお話がありましたが、これからの足もとのエコ・ツーリズムの方向性、将来どうしていくのか、という点も含めてそれぞれコメントを頂きたいと思います。

ハード・ツーリズムからソフト・ツーリズムへ

菊地 氏

ツーリズムは大きく言うと、ハードツーリズムとソフトツーリズムがあります。ハードは、ドイツニーランドに代表される、お金を掛けて、施設をつくって、それを中心にしてツーリズムを行います。ソフトは、どちらかと言うと身の回りのありふれた資源を利用して、自分たちでお金を掛けずにツーリズムをすることです。ヨーロッパの観光・ツーリズムの主流はソフトです。これからの日本のツーリズムはぜひ、ソフトツーリズムであってほしいと思います。お金を掛けずに、身の回りの環境とか資源を楽しみながらゆっくりとのんびりと楽しむような。そのためにも鶴見川ネットワークのような活動は意義があるのではないかと、思っています。

日々の流域活動の成果を、どうツアーに組み込むか

大澤 氏

新春ウォーク、ウォーキング月間、クリーン&ウォークというふうには、具体的な流域ツーリズムの事業として、鶴見川でやってきたのであるが、これまでの成果を踏まえれば、日々活動している場所が一番の原点です。そこをどれだけ入れ込んだツーリズム、具体的にはウォーキングの時に体験してもらうものをどれだけ入れられるか。例えば、歴史案内だけのツアーにはないような、活動している体験をうまく組み込んで、なおかつ四季折々の流域を見てもらう、とか。そういうところに焦点を当てて進めて行かれば、と思っています。そういう意味で、今回のクリーン&ウォークは成果を得たと考えています。

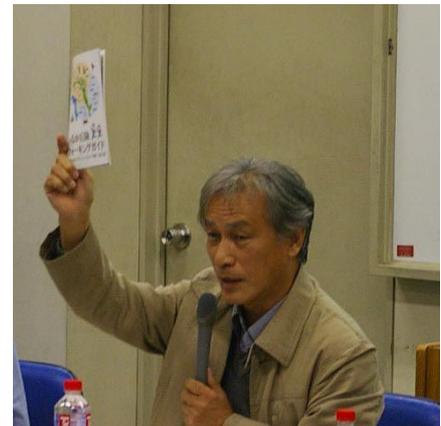
異業種連携：行政との連携が進む鶴見川、大企業からの助成に支えられる小網代の谷 長期的には、鉄道・バスとの連携が目標

岸 氏

異業種ということでは、鶴見川流域では市民と行政との連携が、そもそも異業種かもしれません。これは国を中心として非常にうまく行っていると思います。川が中心であるが、緑地関連もかなりうまく行っていると思います。次は下水がターゲットです。

いるか丘陵については、シーボニアとか油壺マリンパークと連携の話が始まっています。本当は鉄道と組みたいですね。鉄道と組まないとうちにもなりません。先程の「いるか丘陵自然観察ガイド」は鉄道との連携を狙ったが駄目でした。それでバスを考え、自前のバスで何度かやりましたが、ほとんどが大幅赤字でした。

異業種連携で、流域の都市再生型エコ・ツーリズム、丘陵型の都市再生型エコ・ツーリズムを推進する場の芽は多くあると思います。今回も「クリーンアップのあるツーリズムは面白いじゃないか」という手ごたえはあったと思います。小網代の保全是今、トヨタとか三井とかから5~6年で1500万~1600万の助成金、毎年400万ほどの人件費で環境管理を、NPOがやっています。行政は何もしていません。まだ動ける状況になっていないのです。そういう連携が鶴見川にも少し波及していて、魚の調査、外来植生の排除にトヨタ、三井からお金が入っています。小網代の成功を信頼していただいたから、と思います。



岸 由二 氏

まずはエコ・ツーリズムの拠点づくりからはじめよう

岸 氏

私は、地球はダイヤモンドだと思います。それをダイヤモンドに見せるにはどうしたらいいか。ダイヤモンドだと叫んでも誰も反応しません。自分が暮らして、気に入ったところを磨けばいい、と思っています。大きい範囲を磨ける人は大きい範囲、小さい範囲の人はその範囲でいいでしょう。例えば、綱島のバリケン島は大変な人気だが、15年前はただゴミが貯まる堆積場だったのが、地元のTRネットの人たちが磨いて、子どもたちが喜び、今や絶滅危惧種のタコノアシも生えました。あれは小さなエコ・ツーリズム拠点です。

皆さん、明日から、つくろうと思えばつくれます。ただし、月1回、ここで必ずゴミ拾っているよ、とか、月1回、旗立てて魚取っている、とかやらないと磨かれませんか。磨こうと決意した

人がいると、TR ネットはそれを応援に行くシステムをいっぱい持っています。いろいろな助成金で、大学生が1日5,000円とかで応援に行く、とか。いるか丘陵全域にそういうネットワークがあり、小網代はそういうネットワークだけで学生が90人登録しています。ただしひとりよがりでは駄目、安全にしないと。子どもたちが、そこを面白いと言ってくれないと駄目です。

川は行政と連携して極めてやりやすいと感じています。だから流域ネットワークがあるが、さらにそういう仕掛けが増えていくといいと思っています。

5. まとめ

「エゴ」にならずに、将来を担う子どもたちに喜ばれるエコ・ツーリズムを

伊藤 氏

最後に、一人ずつ、とりまとめの一言をお願いします。

菊地 氏

エコ・ツーリズムについて常々思っていることは、エコ・ツーリズムの人間は絶対に「エゴ」ツーリズムにならない、ということが必要だと思います。

大澤 氏

来年早々、新春ウォーク、春にはまたウォーキングを開催します。これからも楽しく元気に足もとのクリーン&ウォークを。

岸 氏

私は、都市再生としての再生型のエコ・ツーリズムと言ったが、今日、菊地先生の話聞いて一中身はずっとそう考えてはいるが—そういう言い方をするのだろうか、と感じています。

都市再生は100年、200年、300年掛かる。産業文明がこれだけ地球をメチャクチャしたので、5年や10年で新しい方向は出ないでしょう。都市再生の長い歴史を、どうにかするようなエコ・ツーリズムはどこから始めるか、と言うと、よちよち歩きでザリガニ捕まえて大喜びする子ども、網で魚を取って大喜びする子どもとか、そういう子どもたちからしか始まらない、と私は思っています。子どもたちが喜んで、泥だらけになって、安心して遊べるような都市の自然の拠点を磨き上げることが、何百年か続けていき、そこで育った子どもたちが世界を変えていく、と私は思っています。とにかく、子どもに評価されるエコ・ツーリズム拠点をつくりたいと思っています。

伊藤 氏

菊地先生、大澤さん、岸先生、ありがとうございました。

私も、ツーリズムのプロジェクトの事務局をしていて、いろいろイベント等を企画しています。興味をもった方にはご参加していただき、みんなで楽しんでいただき、クリーンアップなどで地域貢献ができれば、と思っています。